

シャーロット・ブロンテと女性教育

末 森 恵 子

シャーロット・ブロンテの小説は『シャーリー』を除いては全て学校を舞台とし、主人公の職業も教育に関わるものとなっている。『教授』はそのタイトルが示すように物語はほぼ学校で展開し、主人公とそこの教師兼生徒の女性との恋愛が描かれる。『ヴィレット』の主人公は小間使い兼家庭教師として学校に入るがそこで教師として働くことになり、最終的には自分の学校を経営する。学校経営は『ジェイン・エア』の場合とも共通する主人公の夢であるが、実際シャーロット自身が計画し、そして挫折したのもであった。はたしてシャーロットにとって、またこの時代にとって、教育とはどのようなものであったのだろうか。ヴィクトリア朝に根付いた教育観をそれまでに著してきた思想家には、ダーウィン、ギズボーン、ルソーなどがある。¹ だがここではシャーロットの教育思想の風土について考える時に注目すべき人物として、彼女より約半世紀前の時代に同じくガヴァネスを経験し、学校経営をしながら女子教育の改革を強く訴えた人物であるメアリ・ウルストンクラフトを取り上げてみたい。ウルストンクラフトはその著書『女性の権利の擁護』において一章を割いて教育について論じているだけでなく (Chap. XII On National Education)、女性の墮落の原因の一つはその誤った教育にあるという信条をその主張の中心に据えるなど、教育的洞察の深い人物である。さらに『女性の権利の擁護』以前には、その思想の萌芽が見られる『女子教育考』などの教育論も書いている。シャーロットが生きた時代には既に、ウィリアム・ゴドウィンの『女性の権利の擁護の著者の思い出』(1798) にウルストンクラフトの自由恋愛が描かれ、その急進主義が世間から非常な非難を浴びたために、彼女とその著書の存在は闇に葬られつつあった。しかし一方で

シャーロットと同時代のエリザベス・ギヤスケルなどウルストンクラフトを支持し続けた人々がいたのも事実であり、シャーロット・ブロンテとメアリ・ウルストンクラフトが教育思想を媒介にした接点をもつと考えることは可能であろう。

シャーロットの作品の中でも『ジェイン・エア』は特に著者の主張が明確に表れている代表作だが、それとウルストンクラフトの同じく代表作とされる『女性の権利の擁護』とを比較してみると、似通った点は確かに見られる。ジェインが“*I'll be preparing myself to go out as a missionary to preach liberty to them that are enslaved—— your harem inmates amongst the rest.*” (237) とロチェスターに言い放つ時、彼女はウルストンクラフトを彷彿とさせるヒロインでさえあるのだ。このように我々が『ジェイン・エア』でシャーロットの教育観に触れることが出来るのは、シャーロットの意識下あるいは無意識下に存在する主人公ジェインの思想や行動をとおしてだといえる。本論ではシャーロットの教育思想を主に『ジェイン・エア』から考察し、ウルストンクラフトの教育論と比較しながら、それがヴィクトリア朝という社会的・精神的に不安定な時代にどのような教育思想を提示していたのかについて考察する。ウルストンクラフトの教育論を取り入れるにあたっては、『女性の権利の擁護』だけでなく小説『女性の虐待あるいはマライア』にも目を向けたい。『マライア』の注目度や評価は『擁護』でのウルストンクラフトの思想をさらに発展させたものとして高まってきているので、ここで取り上げる意味が十分にあるに違いないからである。

まずはジェイン・エアという一人のヒロインとウルストンクラフトが描く理想の女性像との類似性に触れておきたい。ここではヒロインの人生・行動など外観的な面において注目すべきものを取り上げてみよう。“*cleanliness, neatness, and personal reserve*”²を遵守しているジェインはウルストンクラフトの求めるヒロイン像にまず相応しい姿をしているのだが、行動の面においてはどうか。『女性の権利の擁護』には理想の女性の人生についてこのように描かれている。“*Formed thus by the discharge of the relative*

duties of her station, she marries from affection, without losing sight of prudence, and looking beyond matrimonial felicity, she secures her husband's respect..." (*Vindication* 50. 「彼女は、自分の立場にかかわる義務を果たしつつ成長し、思慮分別を失わないで愛情に基づいて結婚する。そして、結婚の幸福だけに満足しないで向上を目指し、夫の尊敬を確保する。」[白井訳 98]) この筋書きはヒロインが勉学・仕事の義務を果たしながら成長し、慎重な判断によってロチェスターと愛情に基づいた平等な結婚を果たすという『ジェイン・エア』のそれと違わないものだといえるのではないだろうか。ジェインが「結婚の幸福だけに満足しないで」いたかどうかについては少し疑問が残るものの、その結婚自体がウルストンクラフトが否定するような依存的性質を持つものではないので、ジェインの人生がウルストンクラフトの理想から外れているとはいえないだろう。

また次に述べる共通点はシャーロットの小説のうちでも特に『ジェイン・エア』に表れているものである。ウルストンクラフトの結婚生活における理想は、恋愛感情の後に夫と友情を結びそして理性的な母となることであるが、それはこのような思想に基づく。

In the exercise of their maternal feelings providence has furnished women with a natural substitute for love, when the lover becomes only a friend, and mutual confidence takes place of overstrained admiration — a child then gently twists the relaxing cord, and a mutual care produces a new mutual sympathy. (*Vindication* 152)

ここでわかることは、母性が女性の人生における重要な位置を占めているとウルストンクラフトが考えていることである。実際彼女の著書には共通して母性の賛美が見られる。“The maternal solicitude of a reasonable affectionate woman is very interesting..." (*Vindication* 142) などの表現からも、ウルストンクラフトが母性を女性性の美德の一つとして捉えていることが窺われるだろう。『ジェイン・エア』でも母親になることは女性の人生の到達点

として、ハッピー・エンドの一要素を形成している。ジェインはウルストンクラフトによって母親となるために持たねばならないとされた“sense”と“independence of mind” (*Vindication* 152) をもってロチェスターとの対等な結婚を果たし、最終的に母親となっている。ここにおいて、ウルストンクラフトの理想に見合うヒロインとしてのジェインの人生は完成する。

これらのことから、ジェインの人生は結果として『女性の権利の擁護』に示される理想の輪郭に沿ったものであったといえる。次に示す精神的側面から見たジェイン・エアとウルストンクラフトの共通性は、ジェインがウルストンクラフトの理想を小説中で叶えうるヒロインだという見解をより確かなものとしてくれるだろう。

ウルストンクラフトの唱える分別や精神の独立が『ジェイン・エア』の中に生きていることについては、既に Cora Kaplan (264) などが指摘している。シャーロットの思想を理解するためには、彼女自身の投影でもあるジェインの主張についての考察は欠かせないだろう。まずは当時の社会に衝撃を与えた、ロチェスターに対する魂の平等の主張を取り上げてみたい。

‘Do you think, because I am poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless? You think wrong! — I have as much soul as you, — and full as much heart! ... just as if both had passed through the grave, and we stood at God’s feet, equal, — as we are!’ (222)

これはジェインが彼女の感情を弄ぶようなロチェスターの言動に逆らって言った感情的な言葉ではあるが、(もしくはそれゆえに、) シャーロットの小説の特徴ともなるべき重要な思想を示している。男性であり身分的にも上位にある者の一方的な価値観を告発して自らの存在を強烈にアピールすることは、それまで無視同然の扱いを受けた下位の者の自我の存在を上位の者に気づかせることになるだろう。女性の手による最初の本格的な女性権利書を書いたウルストンクラフトにも当然、同様の目的と意義が見出される。『女性の権利の擁護』で男女の同一性を強く訴えるウルストンクラフトは、『マライア』に

においてもその目的を “the misery and oppression, peculiar to women, that arise out of the partial laws and customs of society” (*Mary* 73) を示すことだと明言している。ウルストンクラフトが性差別においてだけでなく国王・軍隊・聖職者に至るまで権力を否定している (*Vindication* 16-19) ことも考慮に入れると、両者が目指しているのは共にそれぞれの階層構造を問い直した平等な関係であるということがいえよう。

さらに次に示すジェインの主張はよりウルストンクラフトの思想に近く、シャーロットが性別における階層構造の洞察に至ったことを明らかにするものだといいよう。

Women are supposed to be very calm generally; but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties and a field for their efforts as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer... It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex. (96)

これは『女性の権利の擁護』の主張から全く外れていないのはいうまでもなく、シャーロット・ブロンテとメアリ・ウルストンクラフトとの共通点を主張するために有効な箇所である。ここで「一般的」とされる女性像は、当時の「家庭内天使」イデオロギーやそれを唱えるコンダクト・ブックなどによって教育される典型的なものを指しているといえる。そしてウルストンクラフトも同様にルソーからグレゴリィまでの著名な思想家によって描かれた「正しい」女性像を幻想が作り上げた偽者とし、それが女性を “more artificial, weak characters” にするために、またその結果 “more useless members of society” にするために貢献してきたと強く否定している (*Vindication* 22)。このような支配的言説に異議を唱える姿勢こそが、二人の女性の見過ごせない主張なのである。シャーロットは作品を通して身分や性別を超えた魂の平等を訴えたのであり、権力を否定し平等を追及したウル

ストンクラフトの姿勢と、その時確かに共鳴しているといえる。

つまりシャーロットとウルストンクラフトの主張は当時の「女らしさ」の言説への反対の立場を採っていることが共通しているといえるのだが、その言説を全面的に否定しているのではないということは留意しておかねばならない。上述で『女性の権利の擁護』の輪郭に沿ったものと見なしたジェインの人生の外観を辿ると、それは正しいとされた女性像から逸脱しているわけではない。³ そもそもウルストンクラフトの描く人生が当時の女性の規範から外れたものではないのである。ウルストンクラフトの生きた十八世紀は、「『良妻賢母主義教育』と『女性解放教育』という矛盾した教育論を二つながらに胚胎しているところに特徴がある」（滝内 111）とされるが、ウルストンクラフトの思想自体が十八世紀の特徴を孕んでいるものだとはいえないだろうか。そして時代は後になるが、シャーロットの作品にもウルストンクラフトと同じく二つの教育論が確かに存在するのである。外観的には規範の範疇に留まりながらも時としてそれに矛盾するような内面の主張は、二人の作家の教育観をより直接的に表すものであり、中でも「魂の平等」の主張は彼女らの特徴づける重要な思想だといえることができるだろう。

さらに「魂の平等」に関わる問題として、理性と感情の扱いはそれぞれの教育観を窺う時にやはり共通のテーマとなっている。ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』において、女性は“the authority of reason”にのみ服従すべきである（*Vindication* 51）と主張するほど論全体をとおして非常に理性を重視しているが、『ジェイン・エア』での理性の尊重もまた作品の中で重要な位置を占めるものである。両者は共に理性を、その教育観を形成する主要な要素または目的として捉えているのだが、一方で時にそれを脅かすような力を持つ情熱についても（分別を欠いたものでない限り）否定するような観点は示していない。James Diedrickが“In their treatment of anger, Wollstonecraft and Brontë both demonstrate that reason and passion are not necessarily antithetical.”（Diedrick 26）と分析しているように、理性と情熱は単純に逆のベクトルを示しているわけではないのである。そしてそ

の複雑さゆえに、理性と情熱の関係性自体がむしろ中心的問題となって作品を形成していると考えられる。ジェインについて見てみると、彼女はロチェスターとの別れを決めるという決定的な場面においても理性によって激しい情熱を抑え込んでしまうほど理性を尊重する人物であるが、その感情は常に抑えられているということはない。根底でジェインの行動を支配している理性にも勝る情熱が重大な局面において噴出し、ジェインの行動を決定づける時がある。彼女の感情はローウッド学院を離れる時には自由を渴望し、ロチェスターに愛を告白する時には抑制を破るほどの衝動を持ち、セント・ジョンを拒んでロチェスターの元へと向かう時には理性に打ち勝ってその判断を得ているのである。シャーロットがどちらの価値を認めているかを断定することは難しいが、それは双方ともに認めている面があるからなのだ。結局ジェインの中でせめぎあう二つの性質は、対立する一方でもた共存しているようである。同様に、ウルストンクラフトの情熱の扱いについても一方的に抑えるよう主張されているわけではなく、理性によって抑制されているという条件付きで“Women as well as men ought to have the common appetites and passions of their nature,…” (*Vindication* 130) というように認められている。そしてウルストンクラフトが美德とする「慎み」を、“Sacred offspring of sensibility and reason” としている (*Vindication* 121) ことから分かるように、彼女もまた両方の重要性を認めているのである。

ウルストンクラフトの情熱の扱いの重視は『女性の虐待あるいはマライア』においては顕著な傾向となり、『ジェイン・エア』以上とも思わせるものになっている。実際“Author’s Preface”において、ウルストンクラフトは“In writing this novel, I have rather endeavoured to pourtray passions than manners.” (*Mary* 73) と情熱を描く意図を明らかにしている。また主な舞台が“the varying gestures of unrestrained passion” (*Mary* 92) が見られる狂人収容所であるのも示唆的である。女性が教育によって“the slave of sensibility” (*Vindication* 125) にされながらも過度な感情を表すのを禁じられている矛盾した時代において、ウルストンクラフトは「女らしくない」と非

難されたジェインの自己主張と同様の意味を持つ、情念の積極的な表現を試みているのである。⁴ しかしヒロインをとおして表された情念は、当初の著者の目的どおり彼女に不幸な結末をもたらしているといえる。マライアは自分と同じく幽閉されているダンフォードと情熱的に恋に落ちるが、その時の様子には語り手によって“*There was one peculiarity in Maria’s mind: she was more anxious not to deceive, than to guard against deception; and had rather trust without sufficient reason, than be for ever the prey of doubt.*” (*Mary* 189) など、冷静で批判的なコメントが加えられる。そして物語の結末も語りが暗示するとおりとなり、彼女の依存的な愛情は裏切られてマライアは破滅へと向かう。⁵ ウルストンクラフトは情念に賛同する一方で不幸をもたらすものとしてそれを捉え、過度の情念の危険性についての警告を読者に発するという立場をとっていることが、この語りからもわかるのではないだろうか。『ジェイン・エア』においてジェインが理性を持ってロチェスターとの性的不平等の誘惑から逃れたのに対して、マライアがそれから逃れられなかったのは女性の情念の過剰による不幸だといえる。『ジェイン・エア』は、女性特有の不幸を描いた『マライア』の運命を紙一重で逃れえた物語なのかもしれない。

このように、ヒロインにとって深刻な誘惑の源となりうる不実な男性によってもたらされる女性の墮落は、ウルストンクラフトとシャーロットがヒロインを導く際の共通の懸念となっている。ジェインが最初にロチェスターに求婚された時、墮落を暗示する側面は確かにあったように思われる。というのはロチェスターが口では否定しながらも、実際は無意識のうちにジェインを情婦のような存在にしようとしていたからである。彼は過去の情婦にしたようにジェインを宝石やドレスで飾り立てようとし、さらにはトルコの後宮と比較してジェインを憤慨させている。ロチェスターのジェインに対する言動はまさに“*such as a sultan might, in a blissful and fond moment; bestow on a slave his gold and gems had enriched*” (236) のやり方なのである。ジェインに対する“*angel,*” “*little elf,*” “*stray lamb*”⁶などの呼び方もそれを象

徴的に示しており、そこには（セント・ジョンの場合と同様に）本来のジェインとは異なるイメージの押し付けがある。実際、再会して結婚した後の二人に関するわずかな記述の中ではロチェスターはジェインを“the apple of his eye” (397) としばしば呼んだとあるが、それはもはや熱情に駆られた恋人たちの表面的な呼び名でなく、以前と性質が全く変わったものであるといえるだろう。ロチェスターがジェインを誘惑しているという図式が成立するかぎり、二人の関係は不平等なものにならざるを得ない。このような性質の結婚が最終的に破綻する可能性は大いにあったのではないだろうか。事実その時点でロチェスターの妻のバーサは生きており、ジェインの立場は情婦といわれても仕方のないものになろうとしていた。ジェインは熱情に溺れるロチェスターに対し、彼が以前語った愛人の話を思い起こして“I will not be your English Céline Varens” (237) と言っているが、墮落した愛人の話はジェインもまた巻き込まれる可能性のある運命の一つとして提示されたものなのである。

ジェイン自身は女性としての墮落の危険性については、ミセス・フェアファックスから忠告を受けた時に認めることができな一方、過敏なほどに意識している。したがってロチェスターから墮落を匂わせる言動が示された時、彼女は頑なに拒むのである。そこには理性的存在であろうとするジェインの特性がよく表れているのだが、例えば結婚後の恋愛の運命についてジェインはこのような意見を口にしている。

‘For a little while you will perhaps be as you are now, —— a very little while; and then you will turn cool; and then you will be capricious; and then you will be stern, and I shall have much ado to please you: but when you get well used to me, you will perhaps like me again —— *like me*, I say, not *love me*.’ (228)

ジェインは男性たちが書いた本でこの考えを得たのだと言っているが (228)、ウルストンクラフトもやはり男性のそういう側面を著書に記し警告

している。そこでは熱情に浮かれた恋人がいつか必ず“a surly suspicious tyrant”に変わるとされ、女性にとってその結果は“Verily misery, in its most hideous shape”となるのだと断言されている (*Vindication* 120)。ジェインの抱いた不安はこのような男性の裏切りとそれに伴う不幸に他ならない。ウルストンクラフトは『マライア』においても、女性を劣った存在として抑圧し、女性の精神を墮落させるような結婚を“the peculiar Wrongs of Woman” (*Mary* 74) であると断言し、またタイトルによっても強調しているが、それはジェインに潜んでいた危険でもあるとあってよいだろう。『ジェイン・エア』ではこういった精神的な墮落がヒロインにとって特に重要な問題として扱われているのである。ロチェスターの元を去ろうと決心する時のジェインの“*I care for myself. . . . Laws and principles are not for the times when there is no temptation: they are for such moments as this, when body and soul rise in mutiny against their rigour.*” (279) という心の声は、墮落を避けようとする「理性」の主張である。それはロチェスターへの愛情によっても曲げられることのない、断固とした信念としてジェインに与えられる。理性によって精神的墮落を避けること、これこそシャーロットが女性教育として伝えたかったものの根幹だといえるのではないだろうか。

このように女性に度々迫ってくる墮落の危険をシャーロットは描き、ジェインに試練を課しているのだが、そういった危険に対処するための教えをシャーロットは他者からの影響という形でもジェインに与えているのではないかと考えられる。物語中でジェインを間接的に助けているのは、度々指摘されるように、ジェインが関わる女性たちである。彼女らはジェインをその舞台に応じた形で導く役割をしている。つまり寄宿学校という閉鎖的な世界では不合理な世界に適合する方法を教え、自由を求めて踏み込んだ外の世界では自立や解放の可能性を示しているのである。以下にシャーロットが彼女らをとおしてジェインに与えた教えについて具体的に見ていこう。まずはローウッド学院で出会う二人の人物に言及しなければならない。一人目は現状への不満を抑制し許される範囲内で生徒たちを救うという仕事をすることで、

家父長的人物が横暴に支配する世界に順応している、ミス・テンプルである。彼女から教わったのは“more harmonious thoughts”と“what seemed better-regulated feelings” (73) であると、ジェインが端的に表現しているとおりでらう。二人目として挙げられるヘレン・バーンズは、救いを神に求めて自らを世間と離れた位置に置くことによって、現実の苦しみから逃れている少女である。寄宿学校で出会う二人の女性は、家父長制社会で少なくとも反発を受けずに安泰に生きられるこのような二つの選択肢をジェインに提示した。そして彼女らは共にそれぞれの選んだ方法に忠実な結末、すなわち結婚と死、をも示している。その後ジェインが学校を去ったのは、彼女らに教わった生き方を受け入れきれない自分に気づいたためというのも一因ではないかと思われる。

そして（重婚の誘惑を逃れて辿り着いた地である）マーシュ・エンドでジェインが出会ったダイアナ、メアリ姉妹は、また異なる女性の可能性を表している。彼女らは兄のセント・ジョンに依存せず、ガヴァネスの仕事によって自活を目指し、自ら学ぶ力を持つ女性たちである。ジェインに対しては同情から共感へと変わる愛情を示し、ジェインもまた従姉妹との仲に“the pleasure arising from perfect congeniality of tastes, sentiments, and principles” (307) を感じている。ジェインは“we coincided, in short, perfectly” (308) とロチェスターとの結婚で感じたもの⁷に匹敵する表現でその満足感を繰り返し強調している。ジェインにとって従姉妹との強い連帯と、ロチェスターとの愛はほとんど同等な価値を持っているかのように見える。

ジェインにとってそれほどの喜びの源であり、実際従姉妹でもあった彼女らとの関係が表象するのは、女性同士の家族的な絆である。面白いことに、“he [St. John] was sincerely glad to see his sisters; but in their glow of fervour and flow of joy he could not sympathise” (347) という記述にも示されるように、セント・ジョンはその絆からはっきりと除外されている。ダイアナ、メアリとセント・ジョンの思想は、義務や愛情についての考え方、自然への感性に至るまで相容れないものであり、ジェインが“This parlour

is not his sphere.” (346) と思ったように、彼はこの家庭的な安息の場では異質の存在として描かれている。ジェインはセント・ジョンと打ち解けられないばかりか、彼が“a certain influence over me that took away my liberty of mind” (350) を持つように感じている。それゆえマーシュ・エンドではジェインはダイアナ、メアリ姉妹といる時だけ、愛情に満たされながら独立した女性でいることができたのである。それはシャーロットが目指した理想のヒロインの姿であったと思われる。

このようにそれぞれの可能性を示唆する女性たちに出会うことで、ジェインは女性の抱える両面性をさまよっている。それは物語中でどのような決着を見ているだろうか。ジェインは結局マーシュ・エンドでの女性の共同体ではなく、ロチェスターとの結婚という一般的な結末に落ち着く。しかしそれは金銭的・精神的な対等性を示しているがゆえに、女性の自立を特に必要としない性質を持つ結婚というシステムには収まりきれない可能性（または危険）を秘めている。ジェインがこれまで表してきた主義主張を考えると彼女は自立を求めるべきであり、またそれは叶えられてもよいものであろう。しかし、ここでもう一度ウルストンクラフトの体現する十八世紀的矛盾——「良妻賢母主義教育」と「女性解放教育」という二つの教育論を併せ持つこと——を思い起してもよいが、女性の人生の到達点と幸福を結婚という形で望んだ時、シャーロットは矛盾する二つのもの、すなわち結婚と自立、を求めることになるのである。これらを両立させようとすればロチェスターの負傷やジェインの遺産相続などの、不均衡を是正するための特別なエピソードを必要とするだろう。自立の断念を埋め合わせるかのように結婚を対等なものにしようとするそれらのエピソードは、シャーロットの抱えた矛盾に対する解決の一つの形を示しているのだとは考えられないだろうか。

シャーロットがその教育思想に内在する結婚と自立の間の問題をどう扱ったかについて考える時、『ジェイン・エア』だけでなくその後に書かれた小説である（同じくヒロインが自立を目指しつつ結婚に向かう）『ヴィレット』を参照すると、また違う結論が見出される。『ヴィレット』の結末では、恋人と

の結婚はついに果たされないままになっている。そこには “I love him now in another degree; he is more my own” (*Villette* 495-96) という、『ジェイン・エア』に見られる記述⁸と同じような幸福感が示された直後に、悲劇の筋書きが現れる。結婚の約束をしたムッシュ・ポールは船が難破して帰って来ない。“Let them [readers] picture union and a happy succeeding life.” (*Villette* 495-96) と語り手は皮肉な調子で言う。シャーロットは、その最後の著作においてついに結婚といういわゆる道徳的な結末を拒否し、ヒロインの学校経営の夢だけを叶えている。このような『ジェイン・エア』と反対の筋書きを辿る『ヴィレット』の存在は、シャーロットがヒロインの結末の可能性を結婚にのみ限定していないということを示唆するばかりか、『ジェイン・エア』の完全なるハッピー・エンドすらもここにおいてどこか疑わしく思わせるものを持っているのである。

ジェインに多大な影響を与える女性同士の連帯については、『女性の権利の擁護』にその思想を見つけることはできない。⁹ 『擁護』では、女性の問題は殆んど男性や権力者との関係においてのみ論じられるからである。そして女性が生活していくためには結婚市場において勝ち残るしかなかった時代だから、そこに示されるのは “they are all rivals” (*Vindication* 187) という状況なのである。一方『女性の虐待あるいはマライア』ではそれから変化して、ウルストンクラフトは女性同士の連帯による助け合いの可能性を示している。この小説には、主人公を狂人収容所から逃がし、生涯共に暮らす相手になる女性ジェマイマの存在が見られる。Claudia L. Johnsonはこの小説で、マライアは “an alternative to the disastrousness of heterosocial relations” としての女性同士の連帯を結んだとし、マライアとジェマイマの母と娘のような結束から、この作品に “romantic love” の代わりに “the ‘humanizing affections’ in maternal nurturance” が示されていると指摘している (Johnson 204-205)。

『マライア』と比較すれば『ジェイン・エア』は “romantic love” の要素を排除した小説ではないし、¹⁰ ロチェスターとの結婚によってジェインが幸

福を得るといふその結末からいっても、(女性の連帯を同じように明示しておきながら) ウルストンクラフトの小説とは確かに異なるものである。問題となる『ジェイン・エア』の結末部分には賛否両論があり、ジェインがダイアナ、メアリ姉妹と家族を形成して働きながら自活したところで終わることが可能だったという見方もある。そうなってればこの小説は『マライア』と同一の思想を持つものとなったはずである。しかし『ジェイン・エア』には途中までは『マライア』に見られるような女性の連帯の可能性が示されながら、結末はむしろ、男性との関係の中に自立を見出し、のちに理性的な母親となる『女性の権利の擁護』に近いものであるといえる。『擁護』は革新的な思想書だが、その主張が結婚や母性などの異性愛体制の中にある点でも『ジェイン・エア』と共通の性格を持つ書である。だが『ジェイン・エア』の価値を改めて考察する時に注目すべきことは、この作品が『女性の権利の擁護』の思想に共鳴していることだけでなく、その上で『マライア』におけるような展開への可能性をも含んでいるという点なのだとはいえるだろう。

このように、女性教育思想のもとでシャーロットが描く異性愛が全く肯定的だとはいえない面を含む理由として、著者自身の経験の反映を見ることができるかもしれない。ロチェスターのモデルと言われるエジェ氏に失恋し、彼女の結婚生活も病気のために極めて短かったことから、シャーロットが描く幸福な結婚は幻想の産物かあるいは叶わぬ夢として小説に表されることとなったのではないだろうか。そして、シャーロットの人生における「母的存在」の不在や姉妹との関わりも少なからず影響していたのではないかと思われる。Adrienne Richが女性登場人物を母的存在として捉えているように、「母」たちは『ジェイン・エア』の中で“the image of a nurturing or principled or spirited woman on whom she can model herself, or to whom she can look for support” (Rich 143) となって「娘」を導いており、中でも夢の中の母親の“My daughter, flee temptation!” (281) という言葉は最も力強い教えとして作品に生きている。また、シャーロットが実際に経験した女性の共同体として、家族の中でも特にエミリやアンとの文学を通じた交流は彼女

にとって貴重な心の財産であったことだろう。母と、そして姉二人¹¹を亡くしているシャーロットが彼女らに抱いた愛情の渴望、そしてエミリ、アンと結んだ共同体の心地よさが、『ジェイン・エア』での女性の連帯の描写に投影されたと考えることは可能であると思われる。ウルストンクラフトは自らを(小説においてはヒロインを)母親の立場に置いて娘たちへ教育を与える役割を果たそうとしたが、シャーロットは「母」の教えを求めながら、娘としてのヒロインを『ジェイン・エア』に描き、自らの教育思想を表したのではないだろうか。

Notes

本稿は2003年11月3日京都女子大学英文学会において口頭発表した内容に加筆修正したものである。

1. 滝内大三『イングランド女子教育史研究』参照。
2. 『女性の権利の擁護』128頁において、ウルストンクラフトが男女双方の美德としての慎みを論じる中でこれらを美を高めるものとして挙げている。
3. 最近では市川千恵子「レディーとしての戦略——『ジェイン・エア』とコンダクト・ブック」が、ジェインの中産階級への執着と絡めて論じている。
4. 小説の冒頭が既にそれを表している。“Surprise, astonishment, that bordered on distraction, seemed to have suspended her faculties, till, waking by degrees to a keen sense of anguish, a whirlwind of rage and indignation roused her torpid purse.” (*Mary* 75)
5. 小説は未完に終わっており、したがって結末への構想の断片的な文章が何とおりか残されているのみであるが、恋愛についてはいずれもダンフォードの裏切りもしくは不在という不幸な運命に終わっている。ただ、マライアが子供のために生きる決意を固めるという、比較的希望の見られる結末も存在する。
6. ウルストンクラフトは女性を讃える“angel”などの呼び名は、支配欲と結びついて女性の品位を落としめるものだと考えている。(*Vindication* 94)
7. “we are precisely suited in character —— perfect concord is the result.” (397)
8. “I hold myself supremely blest —— blest beyond what language can express; because I am my husband’s life as fully as he is mine.” (396)
9. それどころか、ウルストンクラフトは“women are, in general, too familiar with each other, which leads to that gross degree of familiarity that so frequently renders the marriage state unhappy.” (*Vindication* 127) と、女性の連帯を異性愛社会を脅かす存

在として危険視しているほどである。

10. romantic love と『ジェイン・エア』の関係については、Jean Wyatt の論文に詳しい。
11. 彼女らの存在は、マーシュ・エンドで出会った従姉妹のダイアナ、メアリを思い出させる。

Works Cited

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre: An Authoritative Text, Backgrounds, Criticism*. 2nd ed. Ed. Richard J. Dunn. New York: W. W. Norton, 1987. (Norton Critical Edition)
- . *Villette*. Ed. Margaret Smith and Herbert Rosengarten. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Diedrick, James. “Jane Eyre and A Vindication of the Rights of Woman.” *Approaches to Teaching Brontë’s Jane Eyre*. Ed. Diane Long Hoeveler and Beth Lau. New York: Modern Language Association of America, 1993. 22-28.
- Gates, Barbara Timm, ed. *Critical Essays on Charlotte Brontë*. Boston: G. K. Hall, 1990.
- Johnson, Claudia L., ed. *The Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- . “Mary Wollstonecraft’s Novels.” *The Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. 189-208.
- Kaplan, Cora. “Mary Wollstonecraft’s Reception and Legacies.” *The Cambridge Companion to Mary Wollstonecraft*. 246-70.
- Rich, Adrienne. “Jane Eyre: The Temptations of a Motherless Woman.” *Critical Essays on Charlotte Brontë*. 142-55.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman: An Authoritative Text, Backgrounds, the Wollstonecraft Debate, Criticism*. Ed. Card H. Poston. New York: W. W. Norton, 1988. 白井堯子訳『女性の権利の擁護』 東京：未来社, 1980.
- . “The Wrongs of Woman: or, Maria.” *Mary and The Wrongs of Woman*. Ed. Gary Kelly. London: Oxford UP, 1976.
- 市川千恵子「レディーとしての戦略——『ジェイン・エア』とコンダクト・ブック」 日本英文学会 『英文学研究』 79：2 (2000), 89-101.
- 滝内大三『イングランド女子教育史研究』 大阪経済大学研究叢書第25冊 京都：法律文化社, 1994.